人権標語　最優秀賞（三点）

大崎中学校　一年　中村（なかむら）　陽那乃（ひなの）

「大丈夫？」この一言で
暗い心に　光が入る

大崎中学校　二年　吉岡（よしおか）　生望（うみ）

「行ってきます」
大事な人の「ただいま」を待っている
また一緒に過ごせるあの日々を

大崎中学校　三年　草原（くさはら）　幸芽（こうめ）

見てるだけ
それじゃ何も　変わらない
行動しよう　今すぐに

岩元　みさ 氏

ドリー夢メーカーがたくさんいる

持留小学校　六年
鈴木（すずき）　夢翔（むうと）

「何だここ」とぼくの口から自然と声がこぼれた。そこは、見たことのない光景だった。端から端まで広い、天井も高い大崎中学校の体育館。ここで今から何が始まるのかぼくの心はドキドキが止まらなかった。ただ、ぼくの心の時間はどんどん進んでいき止まらなくなった。落ち着かない心を穏やかに引き込んでいく話だった。心の中が複雑にもなった。

体育館にどんどん人が集まった。児童・生徒数は数えられないほどに多い。そして、みんなが座り終えた頃、体育館の奥から腰塚さんが大変そうに歩いてきた。ぼくは、「何で大変そうに歩いているのかな」と考えた。その答えは、すぐに解決した。

腰塚さんの話が始まった。話のテーマは、「ぼくを支えたドリー夢メーカー」

体育館は拍手に包まれた。腰塚さんは昔にスキー事故で首から下が動かなくなったそうだ。その腰塚さんを支えた人たちをドリー夢メーカーと言うと話してくれた。腰塚さんはお母さんに、

「できるものなら自分が変わってあげたい。」

と言われ慰められたそうだ。そのお母さんの言葉に、

「ぼくはもっと頑張らないといけない。」

と心に誓ったそうだ。そして長い長いリハビリ生活を頑張った。頑張れたのは、中学校教員である腰塚さんにあてられた手紙の存在だった。生徒のみんなが腰塚さんにあてたものだ。それを読んだ腰塚さんは周りのドリー夢メーカーと必死にリハビリ生活を頑張った。その時の腰塚さんは、

「早く退院をして子供達に早く会いたい。」

という気持ちでいっぱいだった。その強い思いが願いを叶え、職場復帰を果たした。ぼくは、腰塚さんから「あきらめない気持ち」を学んだ。大きな夢や小さな夢でも願い、努力を続ければ叶うと信じて自分も頑張りたい。

ぼくは、車椅子に乗ったおじいちゃんと足を痛めているおばあちゃんと一緒に住んでいる。かつておじいちゃんとおばあちゃんもいろいろなドリー夢メーカーに助けられてここまで生きてこられたと思う。おじいちゃんは二〇代の頃に高いところからコンクリートに落ち、背中を打った。けれども命は助かり、一年間ずっと寝たきりだった。ようやく目を覚ましたが、まだ動けなかった。何か月もかかり動けるようになった。そして病院を退院するまで看護師さん（ドリー夢メーカー）に支えられていた。おばあちゃんは心臓の癌にかかったことがある。けれども、やはりいろいろな人に支えられて今も元気だ。

ぼくは二人をほこりに思っている。決して腰塚さんだけでなく、大変な思いをしたことのある人が世の中にたくさんいる。そして、みんなを支えるドリー夢メーカーもたくさんいる。誰かに支えられたり、誰かを支えたりできる大人になっていきたいと思う。